

## 成長期体操選手に発生した上腕骨大結節剥離骨折の2例

○梶田 幸宏 (かじた ゆきひろ)(MD)<sup>1)</sup>, 村松 由崇 (MD)<sup>1)</sup>, 岩堀 裕介 (MD)<sup>1)</sup>,  
伊藤 隆安 (MD)<sup>2)</sup>, 出家 正隆 (MD)<sup>1)</sup>

<sup>1)</sup> 愛知医科大学医学部 整形外科

<sup>2)</sup> 伊藤整形外科

### 【目的】

成長期体操選手に発生した上腕骨大結節剥離骨折2例を報告する。

### 【症例1】

17歳男性, 4歳から体操競技を行っている。鉄棒の大車輪の練習中に右肩関節の疼痛と挙上困難が出現, 2ヵ月間の安静にて可動域は改善したが疼痛が持続し当院受診した。大結節部に圧痛を認め, 画像検査では右上腕骨大結節の部分的剥離骨折を認めた。転位は軽度のため体操休止し経過観察したが骨癒合は得られなかった。6ヵ月で練習を再開したが疼痛は残存したため発症から2年で手術を施行した。手術は鏡視下に剥離した骨片を切除し棘上筋腱を大結節にアンカーを用いて縫着した。術後6ヵ月で競技復帰した。

### 【症例2】

15歳男性, 5歳から体操競技を行っている。3ヵ月前に吊り輪練習中に左肩関節の疼痛出現。競技継続困難となり当院受診。大結節部に圧痛を認め, 挙上は100度程度に制限されていた。画像検査では左上腕骨大結節の部分的剥離骨折を認めた。骨癒合を促すために同部にPRP療法を施行した。施行後1週間から疼痛が軽快し6週間には可動域が改善し骨癒合が得られ, 6ヵ月で練習を再開した。

### 【考察】

体操競技による腱板への繰り返される牽引負荷により発症したと考えられた。症例1では保存療法で骨癒合が得られず手術療法を選択し剥離した骨片を切除し腱板機能を修復することで競技復帰が可能となった。症例2は罹病期間が短く若年であったためPRP療法を用いた保存療法により骨癒合を促した可能性がある。